

「田んぼに牛を入れること」

OCHIAI Kazuhiko

落合一彦

飼料資源研究官

最近、水田や耕作放棄地、里山などに牛を放牧してみたいという農家が増えてきている。

畜産草地研究所(那須)の周辺でもここ2年ほどで急速に放牧の導入を希望する肉牛農家や酪農家が増え、十数戸が放牧を導入し、さらに十数戸が導入を希望している。きっかけは、畜草研で数年前から現地実証試験を実施させてもらっていた肉牛一貫経営のN牧場で開いた現地研修会である。そこに来てくれた20戸ほどの農家のうち、かなりの人が「なかなか良さそうだ」、「これなら自分もできそうだ」と感じて、普及センター、試験場と相談しながら放牧を導入しつつある。

その課程でわかってきたことは、放牧を導入するときに最大の障害となるのが、家族を含めた地域の理解である。「田んぼに牛を放すなんてとんでもない」、「脱柵して他人の田んぼや畑を荒らしたらどうするの!」、「糞尿で汚れた水が流れてくるから困る」、「ハエが多くなるのじゃないか」、「牛や糞尿の臭いが困る」、「電気牧柵は危険だ、子供が触ったらどうするんだ!」etc...。九州のある町では田んぼへの放牧に親戚中が反対して、離婚話まで出たという。日本には奥山に牛馬を放牧する歴史文化はあったけれど、水田や里地里山に放牧する文化はなかった。

日本の畜産は、軍馬と役牛の歴史であり、例外を除いては食料とは関係のない存在であった。魚や大豆から必要なタンパク質を摂ることができる日本はまことに恵まれていたのかもしれない。我が国は瑞穂と麦・粟(あわ)・黍(きび)、芋、大豆、蕎麦それにお魚の国であったのだ。食文化といわれるものの殆どはこれらの

範疇のものであり、牛肉や豚肉や牛乳の食文化はなかった。日本人が畜産物を日常的に食するようになったのはここ数十年程度のことであり、タンパク質やカロリーなどの摂取量は増え、若者の体位も著しく向上した。しかし、その飼料基盤は外国からの輸入穀物におおかたを依存しており、食文化としてわが国に定着するものかどうかは不安がある。現在の畜産は為替レートの変動に左右されるまことに不安定な状態にあるからである。

20年前に岩手の山道で「けかち」(飢饉)で死んだ人々を弔った路傍の碑や言い伝えを見聞きして司馬遼太郎曰く、「岩手の山岳地帯に食料生産と結びついた畜産があったらこのような悲劇は起きなかったのではないか。しかし、米文化を基盤とする権力者はそれを許さないであろうが・・・。」

日本に食料生産と結びついた畜産が定着するために試験研究機関はどんな役割を果たせるのであろうか。水田や里山に牛を入れるという新しい文化の創造にどの程度寄与しうるのであろうか。

